

Title	ドブロリューボフの教育思想：ムチの教育に対する批判の今日的意義
Author	横田，三郎
Citation	人文研究. 19 卷 4 号, p.195-214.
Issue Date	1967
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

ドブロリユーボフの教育思想

——ムチの教育に対する批判の今日的意義——

横 田 三 郎

はじめに

本稿でとりあげようとするドブロリユーボフの教育思想は、1860年前後のロシアの教育、とくにムチの教育とそれへの妥協に対する彼の批判を中心とする。ツァーリによる「上からの農奴制廃止」が1861年であったことを考えただけでも、当時のロシアの教育の古さ、中世紀的性格が十分想像される。一方、現在の日本の教育を見る時、「人間性の尊重」、「個性と創造性の開発」が言われ、教育内容と方法についての現代化も現実の問題になろうとしている。現在の日本が、アジアのみならず世界の先進資本主義国家の一つであり、戦後、日本の教育の力と「先進性」が世界の話題となったことも事実である。従って、日本で学制が發布されるより以前の、あの遅れたロシアの教育について論じたドブロリユーボフの見解などは、今日の日本の教育現実とはおよそ無縁であると考えられるかも知れない。しかし、戦後の日本の民主教育においては、当初から近代主義的に歪曲された民主主義が広範に流布されてきたし、現在では、戦後一時姿を消した体罰も戦前なみに復活し、今また、神話が再び教室の中へ呼び戻されようとしている。従って、革命的民主主義の原則に基づいて、仮借なくムチの教育を批判したドブロリユーボフの思想は、今日の日本の教育を前進させるうえに貴重な価値をもっている。しかも、このことは、アジア的後進性とか天皇制の残滓を払拭しきれないといわれる日本の特殊現象ではない。自由主義と個人主義、そして西欧的デモクラシーが早くから社会に浸透していたといわれるイギリスやアメリカの教育もまた例外ではない。そこでは、未だに公然とムチが学校教育の中に取り入れられているし、ムチを容認する論理は、後に見るように、百年前のロシアのそれに驚くほど似ている。そして、この執拗にして反人間的なムチの論理—体罰の思想に対して自由主義的な批判がいかに無力であり、いかに妥協的にならざるをえないかということも、われわれがドブロリユーボフの批判から学びとるべき重要な現代的な教訓であろう。また、ムチの論理は、その論理自体に対する原則的な批判に加えて、その論理を生み出し、それを必要とし、温存している環境（基本的には社会体制）に対する仮借のない批判とその環境の根本的な変革が行われないう限り、

それを打倒し、克服することはできない。このこともわれわれは彼の批判論文から学ぶであろう。

1 キエフの『非行と罰に関する規則』

1860年、ドブロリユーボフは、ムチの教育とムチへの妥協に対する痛烈な批判論文「ムチで破られる全ロシアの幻想」を書いたが、その直接の動機となったのは、^{ジユルナル・ドリヤ・ヴァスビターニヤ}『教育ジャーナル』誌（1859年第11号）に発表された「キエフ学区ギムナジヤ生徒の非行と罰に関する規則」（以下、単に「規則」という）である。この「規則」は、当時キエフの学区監督官をしていたエヌ・イ・ピロゴフ（1810～1881）によって、1859年夏に発布されたものであるが、この「規則」の作成は、ピロゴフを議長とするキエフ学区の教育委員会によってなされた。ここで、ピロゴフについて簡単に触れておこう。彼は早くから外科医学者として著名であったが、1856年には進歩的な教育論文「生活の諸問題」^{ヴァプロス・イ・ジーズニ}を発表して、その後の教育運動の高揚に一つの端緒を与えた。そして、同年9月にオデッサの学区監督官、1858年にはキエフの学区監督官となり、学校網の拡充、教育の民主的改革に多くの業績をあげると同時に、一連の教育論文において、生徒の自主性、教師の創造的な授業活動等について進歩的な思想を展開したのである。この進歩的な活動は、後に見るような一部の自由主義的な妥協にもかかわらず、アレクサンドル二世の反動的な政府の忌諱に触れ、そのため、彼は1861年に監督官の職から追放されたのである。

ところで、この「規則」は、ピロゴフの説明によれば、ギムナジヤ生徒の非行と罰の意義について、学区内の校長たちの意見の相違を取り除き、生徒たちに公正感と遵法感を植えつけるために制定されたのである。しかし、この「規則」には、これまでピロゴフ自身が批判し、反対していたムチが、制限つきとはいえ容認されていたのである。「規則」の前文で、初めは「ムチの追放」の必要を説きながら、やがて「ムチの追放の困難さ」と不可能性を言い、最後にはムチを承認するという矛盾と妥協の論理が展開される。すなわち、「規則」の前文では次のように述べられているのである。「社会における犯罪数の減少と道徳性の改善は、罰の厳しさよりも、むしろ、ただ一つの犯罪といえども暴露されず、罰せられずには済まないという信念の普及いかんにかかっている。まさにこの信念こそは、生徒の間にも普及させ、それを彼らに行為で示す必要がある。このことを考慮して、ここに制定した非行と罰に関する規則は、少数の例外的な厳重な体罰のケースのためにのみ制定されたものである。……公正な罰の理想は、その罰が非行自

体の本質から、いわば自然に生じたものである。わがロシアの教育からムチは完全に追放さるべきである。……ムチは、道德感情をけなし、罪を犯かした者の自白の自由を、あのありふれたつきもの、すなわち、嘘言、奸策、および偽善の伴った小心な恐怖に替えながら、教師と生徒の間の道德的な結びつきを決定的に絶ち切る。……けれども、わが国ではなお、直ちにムチの使用をやめることはできない。自宅でムチ打たれている子どもたちがわが国の教育機関に入ってくる限り、遅滞を許さぬばあい（少くとも最初の間は）、何か他の罰を考え出すことはまだ困難である。差し当り、われわれは次のことを規則とする外はない。すなわち、この手段は、極めて慎重に用いること、そして、ただ破廉恥な罪が、迅速で強力で瞬間的な感化を要求するばあいのみ用いるということである。」と、（③PP. 605～606）。そして、子どもの非行を27の種類と3つの段階に分け、その各々に該当する罰を定めた一覧表を作っている（③、P.618）。そこで、ムチで罰せられる非行として定められているのは、たとえば、窃盗（犬泥棒も含む）、「言葉や文書や行動で目上の者を侮辱したばあい」、「友人の信仰への侮辱（ファナティズム）」等である。そして、その各々に対して、三段階に分けて罰が行われる。たとえば、第一段階では叱責、第二段階では「ムチの威嚇を伴う叱責」、そして、第三段階で笞刑となる。しかし、笞刑は同一の生徒に対して一度限りで、二度目にはもう笞刑ではなく、放校ということになっている。そして、この笞刑は、「教育委員会の秘密投票による4以上の賛成によって」決定され、非行が発見されてから実際に笞刑が執行されるまで、その非行生徒は監禁されることになっていた。

2 キエフの「規則」の社会的背景

このような「規則」は、しかし、偶然に現われたわけではない。当時行われていた学校法、すなわち、1828年末、ニコライ一世によって裁可された「サンクト・ペテルブルグ、モスクワ、カザン、ならびにハリコフの諸大学管下のギムナジヤ、郡学校、および教区学校に関する法令」では、次のように体罰が承認されていた。「あらゆる努力にもかかわらず、厳罰および体罰すら行わずに済まされなばあいが生ずる。そのため、そのようなばあい教師は、必要ある時にはこれらの矯正手段を使用してもよい。」と。そして、16才以下の生徒、もしくはギムナジヤの下級の三学年の生徒に対して笞刑が規定されていた（⑨の注19、P.565）。しかし、このような学校教育におけるムチは、封建的・農奴制ロシアの社会的諸条件と無関係ではなく、帝制政府の人民に対する暴力的鎮圧手段、貴族地主の農

奴に対する圧制と笞刑に密接に結びついていたのである。このような体制のもとでは、都市の一般住民の間にも暴力的な関係が普及し、それがまた学校にも反映する。1857年に、チェルヌィシエフスキーは次のように書いている。「われわれは、ほとんど誰でも、自分自身の観察によって、次のことを知っている。すなわち、多くの親方のもとで、徒弟たちが最も酷い生活を送っていることを。彼らは、絶えざる責め苦を受けながら、口では表現できないほどに凍え、飢えている。酔払った仕立屋が焼けてで徒弟を突くことなどは稀ではないし、靴屋の徒弟が靴型で始終頭を殴られていることはいうまでもない。」と(①, P.229)。けれども、ロシアが、いつまでもその農奴制の体制を維持していくことは次第に困難になってくる。1825年のデカブリストの叛乱に対する徹底的な暴力的報復手段をもってしても、その後の農民の蜂起を抑えることはできず、1853~56年のクリミア戦争でのロシア軍の惨敗は、ロシアの農奴制の後進性と矛盾を遺憾なく暴露したのである。こうして、農奴制の動揺が強く現われる'50年代の終りには、これまで当然のこととされていた農奴に対する笞刑にも動揺が反映し、多くの新聞、雑誌上で、農奴に対する笞刑について改めて論議されるようになる。たとえば、政府刊行物の一つ、^{ゼムレジュエリチエスカヤ・ガゼータ}『農業新聞』では、その16号に、ア・エス・ゼリューヌイの論文「経済管理の問題」が現われ、農民に対する笞刑を他の刑罰に変える可能性について論じていた。その結果、この論文に対する一連の反響が同紙上に掲載されたが、それには、その問題に対する肯定的な反応も、否定的な反応もあった。そして、体刑の擁護を内容としたものには、たとえば、アストラハンの自由経済会の通信員、ペ・ダヴィドフの論文があったが、彼は、農民に対する笞刑の必要性を無条件に主張しながら、ただ、「罰の方法を決めるばあいには」、罰を与える側が「十分な冷静さと慎重さ」を持つように「配慮した」だけであった(⑧の注4, PP.474~5)。しかし、多くのばあい、問題はまだ、農民に対する笞刑の廃止に向けられたのではなく、「誰にムチ打たすべきか——地主にか、それとも、農村行政当局にか——ということ」に向けられていた(⑤, P.102)。また、ムチの擁護論者ペトローヴォ・ソロヴォヴォのように、「農奴所有者が、自己の希望と裁量で農奴をムチ打つばあい、何回打てるか」という問題を提出したのに対して、50回ではなく40回とか、その半分の20回とか、さらには、その10%減の18回を、という「人道的な」回答が現われたりしたのである(⑤, P.102)。このように、ムチに対する反動的な確信に動揺が現われたとはいえ、ムチを必要とし、温存しようとする帝制の基本体制が存続している限り、ムチは独り農奴に対してだけではなく、社会のあらゆる層において維持されていた。そして、このような情勢の

もとでは、学校へムチが入るのを恐れるよりも、逆に学校からムチが無くなるのを恐れる傾向すらでてくるのである。たとえば、ある郡学校で、笞刑が行われなくなると、多くの親たちが自分の子どもをその学校から退学させたとか、逆に、系統的に笞刑が行われている私立の寄宿学校が繁昌するという現象すら見られたのである（④、P.695）。

一方、農奴制の動揺はまた、それまでロシア社会の良心を代表していた進歩的インテリゲンチヤの中の自由主義的分子の動揺をもたらし、その限界を明らかにする。すなわち、彼ら自由主義者たちは、農奴制擁護、ムチの維持を主張する反動と、農奴制撤廃、ムチの廃止を唱える先進的インテリゲンチヤの間にあって動揺し、結局、「漸進的な進歩」を唱え、それを保障するためには、農奴制維持とムチの温存を主張する反動に対して、「分別ある譲歩」が不可欠であると論じ、こうして、体制の基本的変革に反対したのである（⑧の注2参照、P.474）。このような自由主義的妥協は、農民に対する笞刑ばかりでなく、学校における笞刑に対しても現われる。たとえば、1858年2月に公刊されたモスクワ商業学校の報告書の中で、そこの視学官エヌ・ヤ・キッタールイは、自らをムチの敵だと宣言しながら、しかもムチを使用したことを公然と述べている。すなわち、彼は言う、「わたしがムチに頼るのは極めて稀であり、最も極端なばあいであって、それは、わたしの見解の正しさに疑いが生じた瞬間である」と（⑦、P.209）。このような譲歩に対して、『同時代人』誌はもちろん、『^{サヴレメンニク}ロシアの言論』や『^{ルースコエ・スローヴォ}火花』（レーニンのそれとは別）などの雑誌で幾度となく批判がなされ、嘲笑された。そして、その先頭に立ったのがチェルヌィシェフスキーやドブロリユーボフなどの革命的民主主義者であった。さらに、後になってその妥協をドブロリユーボフに激しく批判されるピロゴフも、'58年当時はまだ、ムチに対してははっきりと反対の見解を述べ、自己の民主的な確信を貫いていた。すなわち、彼は論文「子どもをムチ打つべきか」（『^{オデスキー・ヴェスニク}オデッサ通報』、1858年、4月15日号）において、笞刑はいかなる者にとっても、いかなる時にも、有害であり、不名誉であり、不道德であることを確信をもって説いていたのである。これを読んだドブロリユーボフは、早速『同時代人』誌で、さきのキッタールイの動揺性、妥協性とこのピロゴフの見解の強固さとを比較しつつ、ピロゴフの「勇敢さと見解の公正さ」を賞揚したのである（③、P.599; ⑤、P.101参照）。

1859年にピロゴフたちによって制定された「規則」が、いかにドブロリユーボフを驚かせ、幻滅感を与えたかは、上のことから充分うかがえるであろう。この「規則」に対する批判論文に「ムチで破られる全ロシアの幻想」というテーマ

がつけられ、さらに「ブルータス、汝もか！」（*Tu quoque, Brute!*……）という副題がつけられているのも、そのことを明らかに示しているといえよう。

3 絶対服従の教育に対する批判

学校における笞刑や体罰は、単に罰の一形態であるばかりでなく、農奴制専制政府の行う官僚主義的、形式主義的な絶対服従の教育と固く結びつけられていたのである。この絶対服従の教育に対するドブロリュエボフの批判は、前稿でも一部紹介しておいたように、彼の教育論に一貫していた理性の原則に基づくものであり、決してプラグマティックでアナキーなものではない（⑩参照）。また、それは、弱々しいヒューマニズムに基づいた、博愛主義的なものでもない。先に触れたように、「自己の見解の正しさに疑いが生じた瞬間にのみムチに頼る」と公言したキッタールイが、同時に、「教師は、子どもに同胞への愛を教えるとともに、教師自身が子どもに対するこの愛の感情を忘れてはならない」と偽善的に述べていることに対して、ドブロリュエボフは、ピロゴフの見解を対比させながら次のように批判する。すなわち、「キッタールイ氏にあっては、このようにして、教育学は博愛と混同され、従って、そのため彼はムチに関する自己の見解の正しさに対する疑いの瞬間が現われさえするのである！……子どもを怒らせはせぬかとか、子どもに対して思いやりが不足しはせぬかという博愛主義的不安に従うのではなく、極めて卒直で、強力で、冷静な教育学的判断に従っているピロゴフ氏が、このことをどう考えているかを見てごらん下さい」と（⑦，P.209）。

ドブロリュエボフは、ピロゴフの論文「生活の諸問題」を高く評価しながら、それに関連して自己の見解を展開した有名な論文「教育における権威の意義について」を、1857年に発表した。彼はその中で、子どもの理性的な、自然な発達を台なしにし、将来のマルチャーリン（おべっか者）を養成しようとしている絶対服従の教育に対して、痛烈な批判を展開した。彼によれば、当時のロシアの教育は、外面的なものが支配的であり、内面的なものが無視され、「過去を未来の理想とし」、全ての進歩的なものに敵対していたのである。そこから、当然のこととして、「新しい世代に対して、古い世代の意見に、無条件に、盲目的に服従すること」が強制されるのであり、そして、理性的な説得をけなすのであるから、ムチが学校に入ってくるのも不思議ではない。しかも、当時の反動的な教育論によれば、絶対服従やムチの教育によってこそ、子どもは賢くなり、意志は強くなり、道徳的にも高められるとされていた。ドブロリュエボフは、このような間違った反動の見解を徹底的に駁論する。彼は、絶対服従の教育が、反動的な見解と

は全く逆に、子どもの知的、道徳的、感情的発達的全てに亘って、測り知れないほどの悪影響を与えることを論証する。すなわち、絶対服従は、子どもに自ら合理的に考える努力を放棄させ、真理の感情や自らの理性的な確信から遠ざけ、ひたすら命令に違反せぬようにという配慮のみを残すようになり、人格の独自のな発達は全く望めなくなる。感情の面でも人間的なものは全く失われる。すなわち、「独自に考え、活動する自由（ある程度までであるが）が子どもに与えられると、子どもは快活で懇切になり、最も人好きのする感情で充たされ、柔和さ、冷静さ、さらに、自分が公正だと認めたことでは、最も気持のよい理性的な従順さを示す。これに反して、抱いていた欲望も充足されず、筋の通った説明すら与えられず、子どもの活動が拘束され、彼の志向が抑圧されたばあい、そして、自分自身の自覚的な生活の代りに、子どもが死体のように、自動人形ののように、単なる他人の意志の従順な道具にならねばならないばあいには、当然のことながら、暗い、鈍重な傾向が子どもの心を占め、頭がおかしくなり、しおれ、生気がなくなり、他人に対して敵意を示し、最も低俗な感情と気分の犠牲となる」（②、P.142）。そして、子どもが、自分の意志を押えて、他人の意志に服従しようとする努力と「闘い」こそが子どもの道徳的力を発達させる、というゼーデルゴリムの誤った見解を批判してドブロリユーボフは次のようにいう。「ゼーデルゴリム氏が闘いといっているのは見当違いである。ここでは、実際のところ、闘いなどはなくて、単に、闘うことのない屈服があるだけであり、その屈服は、何回も繰り返えされると、意志の強さではなく、徳道的な衰弱をきたす。そして、もしその行為の中に実際に闘いがあるとしても、それは最も非合理的なものであろう。つまり、一方では、内面的な力、自然の傾向があり、子どもはそれを正しいと思っている。ところが、他方では、他人の専横とか、子どもが専横とみなしているものの外面的な、訳のわからぬ強制がある。……そして、無条件服従にあっては、必然的に外面的な力の方が勝利する。そして、このような状況では、不可避免的に内面的なエネルギーがなくなり、そして、外面的な影響に抵抗しようとする熱意も奪いとられるに違いない。」と（②、P.144）。こうして、絶対服従の教育においては、子どもは、成長どころか、あらゆる面で台なしにされ、非人間化されるのである。すなわち、「判断や見解における独自性の欠除、心の奥底にある絶えざる不満、行動における無気力と不決断、外部の影響に抵抗しようとする意志力の欠乏、一般的な無個性、そして、その結果としての無思慮と卑劣性、自己の義務に対する堅固で明確な意識の欠除、さらに、以前から決められていたものとは異った、何か新しい、より完全な勝れたものを生活の中に持ち込むことができないこと——

これらは、人間を生活の闘いに出してやるさいに、絶対服従の教育が彼に与える贈物なのである。」(②, P.145)。このように、測り知れない恐ろしい結果をもたらす絶対服従の教育が、その徹底した人間不信、理性の無視、合理的な説得の軽視から、服従せぬ者、指示に背く者に対して、その理由のいかんを問わず、非人間的、動物的な体罰を加えるのも当然のことであろう。

4 体罰とムチに対する批判

キエフの「規則」に対するドブロリューボフの批判は、「規則」に具体化されたムチに対するピロゴフの譲歩に向けられている。ところで、すでに述べたように、ピロゴフは良心的な教育行政官であり、教育理論家でもあったが、決して農奴制を擁護したり、ムチを信奉する者ではない。しかし、彼は、「規則」の制定に当って、それまで抱いていた自己の確信に反して、環境に譲歩し、ムチを承認するにいたったのである。従って、このばあいのドブロリューボフの批判は、ムチに対する批判というよりは、ムチへの妥協に対する批判である。しかし、妥協に対する批判も、もちろん、ムチや体罰の教育に対するドブロリューボフ自身の徹底した批判があって始めて説得力を持ってくる。彼は、絶対服従の教育の系としてでてくるムチの思想に対して、すでに論文「教育における權威の意義について」の中で批判を加えている。すなわち、説得ではなく、棍棒によってこそ、物判りの悪い人間を感動させるのだという無神経な主張に対して彼は次のように反論する。「これは、まるで棍棒が確かに何かを教えることができるかのようである。あたかも人間を殴ることによって、あなた方は、彼を道徳的に向上させたり、あるいは、彼に対して、あなたが彼よりとにかく力が強いという確信以外の何らかの確信を植えつけることができるかのようである。……^{ドレツシローフカ}仕込みのためなら、もちろんムチの論理 (argumentum baculinum) で全く充分である。このやり方で馬は調教され、熊はダンスを仕込まれ、また、人間が巧妙なプロの手品師に仕立てられる。しかし、いかにめいめいの業が巧妙であろうとも、馬にせよ、熊にせよ、また多くの人間にせよ、このように育てあげられれば、このことから少しも賢くなりたはしない」と(②, PP.148—149)。そして、ムチに妥協したピロゴフに対する批判は、それまでのピロゴフの、ムチに対する毅然とした反対の見解、および「規則」自体の前文の初めて述べられているムチへの痛烈な批判を引用するところから始められている。すなわち、笞刑は誰に対しても、何時でも有害であり、不名誉である、とか、ムチが教師と生徒の間の道徳的な結びつきを絶ち切る、といったピロゴフの見解である。これらは、もちろん、ドブロリューボフも全面的に肯定している見解であり、確信であった。そして、ドブロリューボフが、単に

理論的にムチを批判するにとどまらず、心の底からムチを憎んでいたことは、管刑に対する彼の表現からも充分察知することができる。彼は、生徒に対する管刑を、「不快至極な悲惨さ」、「犯罪行為」(③, P.603), 「ムチによる教訓の醜悪さ, 不快さ」(③, P.607)といい、また、「われわれが、この『非行と罰に関する規則』と名付けられた忌わしい、得体の知れない迷路に陥った時、われわれ自身が何だか穢わしくなった」(③, P.618)と告白しているのである。そして、1858年にキエフの学区内で管刑を受けたギムナジヤ生徒の一覧表は、各校での管刑がいかにもまちまちに、いいかげんに執行されているかが明瞭に示されているのであるが、ドブロリユーボフはその表を示しつつ、次のように断言している。「この一覧表からすでに、注意深い教師なら承知しうることの一つは、わが国の教育では、不当にかつ愚かにムチが使用されているということである。これらの数字を比較するだけで、ギムナジヤから断乎としてムチを追放することが正当化されうる」と(③, P.602)。

5 ムチへの妥協に対する批判

すでに見たように、ピログフは、ムチを学校から追放すべきことを確信し、幾度もそれを明言していながら、それにもかかわらず、ロシアの教育現実から、直ちにムチを廃止することはできないとして、「規則」の中で管刑を承認した。このムチに譲歩する理由としてあげられたのは、先にも触れたように、家庭でムチ打たれている子どもが入学してくること、そして、両親の方でも学校での管刑を望んでいるといわれること(④, P.703), さらに、教師の教育技術の拙劣さということも加わっている。後の点について、ピログフは、「規則」施行後の『報告書』中で次のようにいっている。すなわち、ムチではなくて「他の、道徳的な手段をうまく使用するためには、教師の側の技術が遥かに進歩しなければならない」(④, P.706)と。

このような妥協に対して、ドブロリユーボフは詳細に、徹底的に批判を加えている。彼はまず、「規則」には明白な矛盾があることを指摘している。すなわち、a) ムチは「遵法感の形成にとって適当ではない」とされながら、まさに「遵法感を普及する」ためにムチが採用されていること、b) 特定の「非行の本質」から、恰かもムチが「自然に出てくる」かのようにいわれていること、c) ムチが「最初の間」用いられるとされながら、同一の生徒に対して管刑は一回限りで、非行を重ねたばあいは放校されるのであるから、この「最初の間」ということは非現実的であること、d) 管刑は「非行に直接引続いて行われねばならない」と

いわれながら、笞刑が決定され、執行されるのは、教育委員会の招集、審議、票決という手続きを経た後になるので、「直接引続き行う」ということは嘘になること、e) ロシアの官僚の間で最も広範に行われているあの忌まわしい収賄の最初の現われに対してよりも、単純な窃盗に対する罰が不当に重いことは、ギムナジヤ生徒の大部分が将来官途につくことを考えれば、闇の現状を肯定することになり、さらに、f) 信仰上の争いをムチで解決しようとし、おまけに、そのばあいムチ打つべきか否かの判定を友人に委ねるという「規則」の野蛮性、等を指摘している。しかし、現代のわれわれにとって、一層重要であると考えられるのは、次のようなドブロリューボフの見解と批判である。

第一に、学校からムチを追放することは、困難ではあるが、絶対に可能だということである。ドブロリューボフは言っている、「果して困難と不可能とは全く同一であろうか。困難なのは、何か他のことを考えつくことがそうなのである。けれども、それにもかかわらず、それは可能なことを意味しないだろうか。さあ、それではやって下さい。そのためにこそ教育委員会、視学官、校長、監督官等々があるのではありませんか。……ボタンが整っているか否かを監督するためなどに彼らが任命されているのではない。また、彼らは、新しい世代に古臭い慣習を機械的に適用することだけに自己の活動を限定することはできないではないか。……一体、警官のような予定表を編成することだけに彼らの任務があるのではなかろう。つまり、どのようなことに対しては生徒からピロークを奪い、スプーを奪い、さらに丸ごと食事を奪うべきか、いかなる非行に対して生徒を一日監禁すべきか、いかなる非行に対しては三日監禁すべきか、というふうに。これらの献身的努力も全て、教育のためには甚だ遺憾である。たとえば学校で、ムチよりもっと合理的で、ずっと不名誉でない新しい罰の方法を見付けようとする配慮が奪われるからである」(③, P.607)。ムチを学校から追放することが可能だということは、部分的ではあるが、当時すでに現実に証明されているのである。すなわち、妥協的にもせよ、ムチに制限を加えたこの「規則」が施行される前と後では、ピロゴフ管下のギムナジヤの笞刑は大きく変っているのである。ピロゴフの『報告書』の中に掲げられていたその数を引用しつつ、ドブロリューボフはいう、「この表の数を比較しただけでも、教育からムチが追放できないかのような、そして、また、世論がこれに抵抗しているかのような断言がいかに公正を欠いているかわかるのである」(④, P.702)と。事実、たとえば、「規則」の出る前の1858年には600人中290人も笞刑を受けていたヴォルインスカヤ・ギムナジヤでは、施行後の'59~'60年には、635人中5人に激減しているし、'58年には399人

中39人の笞刑が行われたポルターフスカヤ・ギムナジヤでは、'59~'60年にはムチが全く使われていないのである(④, P.701)。

第二に、「突然ムチを追放することはできない」というばあいに予想される漸進性ということは、結局、積極的にムチを追放しようとする意志のないこと、怠惰な他人委せの逃げ口上に過ぎないことをドブリューボフは論証する。「打撃の数を減らせるのだろうか。そういうことであれば、ここでの問題は、打撃の数ではなくて、罰の方法自体にあるのではなかったのか。それとも、あなた方は、以前なら仮借なくムチ打ったようなケースの中、幾つかのケースにはムチを使用しないことによって、漸進性を遵守したいと考えているのか。けれども、その特別なケースを決めるばあいに、自分が掟として採用している原則に一致せねばならぬという個人的な教育観にはっきり従わねばならない。もしあなた方が、自分の教育原則としてムチを採用しているなら、そのばあいあなた方は、そのこと自体によって、有効な教育方法としてのムチの合法性を承認したことになる。すなわち、あなた方の判断で、当然ムチに値すると認めた当の非行の本質に対するあなた方の見解が変らない限り、あなた方も普断にムチを維持せねばならなくなる。……かくして、あなた方の『突然に』ということには何らの実際的な意味はない」(③, PP.607~8)と。そして、「突然に」とか、「不可能」という言葉の中には、このばあい、極めて消極的で怠惰な「オブローモフ主義の全ての魅力、全ての旦那的な至福」(③, P.608)がこめられているのであり、ムチが維持されるのは、その追放が不可能だからでは決してなく、「ムチが、尊敬すべき教育家たちから、新しい、より人道的で聡明な教育方法を案出することを免がれさせてくれるからこそ、ムチが良いのである」(③, P.608)ということになる。

第三に、家庭でムチ打たれている子どもが学校に入ってくる限り、学校からムチを追放できないというのは、どのような意味を持っているのであろうか。ドブリューボフによれば、「このことは、学校が良い手本を示さないということ、そして、このムチ打ちが、ロシアのあらゆる辺境や裏町から根絶されるまでは、多かれ少なかれ、学校は従前通りムチ打つだろう、ということである」(③, P.609)と。当時、ロシアの中等教育はほとんど貴族、官吏、および商人の子どもの専有物であったが、工業の発達や農民の解放によって、将来は多数の町人、職人、あるいは農民の子弟がギムナジヤに入学することも予想されていた。教養ある特権階級の家庭ですらなおムチ打ちが行われているのであるから、下層階級の家庭から早急にムチが追放されるのを期待することはできない。従って、当時の予想では、ギムナジヤにまだ極めて永い間、家でムチ打たれた子どもが入学する

ことはほぼ間違いないとされた。従ってまた、「そのことを理由にして、わが国の教育学はムチに対する忠誠を維持していくであろう！」（③, P.610）ということになる。だが、このような考え方は、ちょうど、「農民は、彼がその粗野な言動から脱しきれず、遵法感と自尊心を持たないうちは、解放することはできない」という農奴制擁護論者の考えと同じであると、ドブロリューボフは断言する。「これらの愛すべき思想家たちは、農民は解放されない限り、それらの素晴らしいものを手に入れることはできないということを知ろうともしなかったのである。キエフの教育家たちもまさにその通りである。彼らは、恐らくどうしても次のことを聞き入れようとはしないであろう。すなわち、『家でムチ打たれている子ども』の性格は、たとえ学校の中であれ、ムチ打たれず、人間的に待遇される時にもみ穏かになり、より人間的な罰が身にこたえるようになる、ということ。ところが実際は、もちろん、家でムチ打たれ、ギムナジヤでムチ打たれ、到る所にムチの連帯保証がある。——このばあい、彼らは心ならずも気が荒むであろう！」（③, P.610）。

第四に、ムチは何らの道徳的矯正力もないばかりでなく、逆に道徳的な墮落を招来するだけであることをドブロリューボフは強調している。「残念ながら、ピロゴフ氏の『報告』には、窃盗で笞刑を受けた者が常に矯正されたのか、また一般的に笞刑が、それを受けた者の性格や行動にどのような結果をもたらしたかについては述べられていない。……だが、矯正が認められたところで、そのばあい、その矯正を羞恥心に帰するのでない限り、ムチによる身体の痛みに戻するなどということは良識が許さない。……けれども、羞恥心は、恐らく、刑の執行のばあいよりも、その行為が発見され、審理される時の方が大きかったはずである。しかもその上、当然考えられることは、多くのばあい、真の意味で明瞭に墮落しているのではなくて、単に愚かなために他人のものを盗んだという少年が罰せられたことである。……このようなことは、ムチなどなくともやめさせることができる。ところで、無礼についても一言する必要がある。これは、あるいは、子どもの感情の激発かも知れない。だとすれば、恰も教師が子ども自身になって、その侮辱に復讐すべきであるかのように、その無礼の故にムチ打つのは残酷ではだろうか。あるいはまた、無礼や他のあらゆる侮辱は、生徒の墮落した性格とか、校長との対立とかに起因する重要な性質を持っているかも知れない。このようなばあいには、放校が最もよい。なぜなら、もし笞刑の後で、生徒が嫌いな教師に対しておとなしくなったとしても、まさにそのために、心の中での憎悪は一層強く燃え上るではないか。よそよそしさと偽善、それは、このようなばあいにムチ

を使用することの最も直接的な結果である」(④, P.703)。

第五に、生徒に対するムチや体罰が合法化されている所では、ほとんど何時でも何処でも同じであるが、それを執行する側の恣意や専横が大巾に許されていることから、ムチや体罰は、一層非人間的、反道德的となり、さらにそれが生徒にも反映することをドブロリユーボフは指摘している。すなわち、この「規則」も、「あらゆる種類の目上の者と教師の、ギムナジヤ生徒に対する義務は定められておらず、反対に、その法典自体が、目上の者は無分別で粗野であってもよい——自分で侮辱を挑発してもよい——と言っている」(③, P.614)し、さらに、「大部分の体罰が、目上の者への侮辱に対して定められているのはなぜなのか。生徒にとっては、すでにこの決定自体の中に、遵法性ではなくて、最も軽率な、最も怪しからぬ専横を見てとる権利はないのであろうか。目上の者には、ムチなどなくとも、自己の人格を生徒の侮辱から護るのに十分な手段があるように思われる」(③, P.615)。従って、教師が「いかに生徒を監禁しようと、いかにムチ打ちしようと、いかに放校しようと、諸君のところに気儘で粗野な行動を惹き起す教師がいる限り、残りの生徒の間に(諸君の殲滅活動の結果、たとえ彼らが僅かに $\frac{1}{10}$ しか残らなかったにしても)、必ず無礼や目上の者への侮辱や専横も現われる」(③, P.614)のである。こうしてまた、教師が非人間的な体罰を恣意的に生徒に課することによって、教師は自らの人間としての名誉を汚し、このような「教師の行動は、自分の執念深さと、自己自身へのあらゆる尊敬の不足を証明するだけ」(③, P.616)なのである。

6 ムチを生み、温存する環境への批判

以上のように、ピロゴフに対するドブロリユーボフの批判は容赦のないものとなっているが、それは、ピロゴフが、「規則」の制定に当って、ムチを要求する環境に譲歩したからである。しかも、その譲歩は、「些細なことではなく、原則において譲歩したのである。つまり、以前にはそれに反対して自己の見解を明確に表明していたことで譲歩した」(④, P.687)からである。しかし、ドブロリユーボフの批判は決してピロゴフ個人にのみ向けられたわけではない。ピロゴフのように高潔な、当時の最良の個性ですら、そのような重大な譲歩を余技なくさせられた「闇の環境」こそが問題であったのである。だが、この闇の環境を自由に、徹底的に暴露し、批判することは、当時の厳しい検閲のもとでは不可能であった。事実、1860年2月22日付けのエス・テ・スラヴッチンスキー宛のドブロリユーボフの手紙には、検閲によって「ピロゴフに関する論文がむしりとられた」ことが述べられている(⑥, PP.401~2)。従って、この点での彼の叙述は極め

て不本意で不十分なものにならざるをえなかったと思われる。われわれは、このことを考慮しつつ彼の主張を見ていこう。

さて、ドブロリューボフは、論文「ムチで破られる全ロシアの幻想」でも、また、論文「一難去ってまた一難」においても、偉大な英雄が単身敵の大軍を打ち負かすといった「英雄物語りの時代はとっくに過ぎてしまった」こと（③，P. 597），従って、英雄物語りに出てくるような奇跡的勝利に期待をかけることがいかに非現実的であるかを繰り返し述べている。そして、現実には、勇敢な改革者の周囲には、この「解放事業を妨害する蒙昧主義者」，「實際上のこまごました時代遅れのもの」がたてる「反対の雑音」（④，P. 707，P. 708），「あらゆる種類の固陋な人間，無教養な連中，無頼漢，低級な人間どもからなる無数の軍勢が取り囲んでいる」（③，P. 596）のである。従って、このような「環境の重圧のもとでは、どれほど高潔な人格ももちこたえることはできず」（④，P. 687），個々の人間が孤立して活動するばあいは、どうしてもその「闇の環境」に妥協せざるをえなくなるのである。そして、ピロゴフがあのように環境に譲歩したにもかかわらず、結局、ツァーリの政府によってその職が解かれるという厳しい現実が現われた直後に書かれた論文「一難去ってまた一難」において、ドブロリューボフは次のようにあらためて環境の力を強調している。「わたしは、すでに、『最良の人格をも道徳的にひどく衰弱させるような環境を攻撃した』かどで、イエ・スウド〜氏から何か非難めいたものを受けた。けれども、わたしはあの論文の中で、環境の破滅的な影響について述べている箇所は、まさに10倍も強調しておくべきだったのである。ピロゴフ氏の告白から、環境がすでにそれ自体その俗悪さで、先進的な人々の活動をいかに制限しているかは、おわかりになるであろう。けれども、忘れてならないことは、環境はいつも受動的なのではなく、それは時として、彼ら先進的な人々の活動に積極的に介入するのである。そして、その時には、その混乱の中で良識が失われてしまうほどの奇妙な、ばかげた現象が起るのである」（④，P. 706〜7）と。このような、当時のロシアの一般社会の停滞性と反動性は、そのまま学校環境にも反映していた。とくに、教師の官僚化は鼻持ちのならぬものであった。従って、ドブロリューボフも、かつて、ロシアの「教師一般に対して、余りにもバラ色の、余りにも最良目な見解を持っていたことを後悔して」（③，P. 612）いる。現実には、当時の大部分の教師たちは、「教育学的分別も、仕事に対する愛情も持たず、時代遅れの原則に従って行動するか、あるいは、ただ新しい原則について語ることができるだけで、合理的な原則を認識せず、そして、何か相当良いことを行っても、それは単に上司の機嫌

をとるために過ぎない」(④, P.712)という状態であった。そして、学校には、「管理主義と授業における形式主義、昔ながらの法典と法規——これら全てが残されていたし、また、教育委員会が、たとえもし何らかの自由な新制度を望んでいたとしても、その自由な活動をこれらが拘束していたのである」(④, P.713)。従ってまた、生徒の非行も、このような「学校の一般的な機構と、生徒が置かれている環境に条件づけられている」(③, P.619)のであった。

ところで、このような環境は、部分的に修正できるようなものではなく、「決定的、根本的に変革する」(④, P.713)ことが必要であるとドブロリューボフは断言する。しかし、それは、単に、個々の人物の奮闘によるだけでは達成されない。自覚ある人々の全てがそれに向って努力して初めて実現できるのである。ドブロリューボフは言っている。「現在では、われわれは、まさにピロゴフ氏の実例から、このような要求が、最良の人物にとっても、もし彼らが自分だけで行動するなら、決して実現できないということを確信するにいたった。……社会が、環境自体が、自己の情況に注意を向け、それを変更する必要性を感じることが必要なのである。環境なるものは、——これは、われわれ全て、つまり、ピロゴフ氏も、イエ・スウド〜氏も、わたしも、ドラゴマノフ氏も——全てがこの環境の一部であり、そしてその全てが、力と能力のある限り、心から確信していることを自由に実行できるように、われわれの状況を根本的に変革するよう奮闘する義務がある」(④, P.714)と。つまり、彼は、当時のロシアの息づまるような、全ての生気を失わせるような環境の力を強調しながらも、決してニヒルな絶望に陥ったり、無力で空虚な憎悪の言葉を投げつけて済ますといった投げやりな態度をとっているのでもない。逆に、この環境の根本的変革の可能性を確信し、その可能性の一つの有力な根拠を、まさにこの闇の環境の中から出てくる新鮮な一条の光の中に見、それに対して心からの期待をもって呼びかけているのである。彼は自らに問うて言う、「一体なぜわたし自身が、この環境について、あのような惨めな描写をしながら、しかも、その環境に再び呼びかけているのであろうか」(④, P.714)と。それは、「以前に心を迷わせたことを恥づかしく思わず、新しい要求に移って行くような力さえ多く持っている」(④, P.714)ような、若くて新鮮な勢力が、「ピロゴフ氏ですら、その生気のなくなるような影響に打ち負かされざるをえなかったような、当の環境自体から出て」(④, P.688)いることを、彼は確信をもって見ていたからである。

7 今日の教育におけるムチと体罰

ロシアの、あの闇の環境自体の中から新鮮な勢力が現われて、その環境を根本

的に変革するというドブロリューボフの熱望と確信は、1917年の社会主義革命を経て現実のものとなった。そして、今日のソ連の教育においては、ムチはもちろん、一切の体罰が完全に廃止されている。

しかし、ムチを要求する闇の環境は、ひとり農奴制ロシアの特殊現象ではない。今日の先進資本主義諸国の教育環境は、帝制ロシアのそれとは著しく異っているとはいえ、ムチに関する限り大差はない。まず国外に目を向けよう。昨年、『時事通信 内外教育版』の紹介するところによれば(⑪、⑫)、ソ連、ポーランド等の社会主義国においてはもちろん、ヨーロッパでも多くの国で体罰が禁止されているが、しかし、イギリス、アメリカ、デンマーク、スイス等の諸国では、今日なおムチと体罰が公然と行われていることを知る。しかも、それらの国におけるムチへの要求と妥協の論理は、すでに見た百年前のロシアのそれと驚くほどの一致をしめしているのである。たとえば、イギリスのばあい、「(教員)組合(Educational Institute of Scotland)としては体罰の廃止に同意するが、今直ちに全面的に廃止してしまうことは『实际的でない』と主張している」、「比較的小さな罪や学習上の誤ちを犯した生徒にも、ムチを適用すべきだと主張する人びともいるが、体罰という手段は、とくに重い罪を犯かした生徒のばあいに、はじめて適用すべきだという考えを教師は一般にもっている」、「体罰をまったく廃止すべきだという意見に、世論が組しようとしているわけでは決してない」(⑪)、「このムチは悪事に対する即決的な罰であって」とか、あるいは、「体罰を加える前にたとえば『この行為を繰り返したらこんどはムチで打つ』という意味の予告をしておく」(⑫)等々といわれている。さらに、百年前の帝制ロシアのムチが1828年の学校法によって基本的に承認されていたのと同様に、イギリスの教師も、ムチの合法性を法律の上に求めている。すなわち、「普通法の上で教師は、子どもの保護を委任されている時間中、親の代理(in loco parentis)としての役割りを果たしているものと考えられる。ということは(その時間中)教師には、分別のある親としての権利と義務が与えられていることを意味する。このことから、子どもに対する親としての教師の権利が生まれ、罪のある行為を犯した子どもに対し、体罰その他の罰を加える権利が生まれる」(⑪)と。それだけではない。今日のイギリスの教師は、次のように主張することによって、恰も行政機関に対する教師の抵抗、教師の教育の自由を示しているように見えながら、実は帝制ロシアの一般教師をも顔色なからしめているとすらいえよう。すなわち、「体罰に関して地方教育当局が規則を設けて、教師をもしばることは最も望ましくないことである。法的に権利のあることを行使するにあたって、それをどう行使すべきか、あるいは行使すべきでないかについて行政機関が教師に指令す

ることは、教師を侮辱することになるように思われる」(12)と。アメリカでは、法律で体罰を禁止している州は、コロンビア特別区、ニュージャージー州、ロードアイランド州の三州だけであり、それに、シカゴ市、ボルチモア市、ニューヨーク市、およびフィラデルフィア市の四市が加わるだけである(11)。さらに、最近、NEAの行った調査によれば、小学校での体罰に賛成する教師は、小学校教師の70%、中等学校教師の75%という驚くべき数を示している(11)。

次に日本のばあいを見てみよう。戦後新しく制定された(1947年)、現行の学校教育法は、その第11条において、次のように規定している。「校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、監督庁の定めるところにより、学生、生徒及び児童に懲戒を加えることができる。但し、体罰を加えることはできない」と。こうして、はっきりと体罰が禁止されているのであるから、今日の日本の教育は法律に関する限り、百年前のロシアはもちろん、今日のイギリスやアメリカよりも遥かに進歩した条件のもとにおかれているといわなければならない。そして、この法律が制定された前後の時期、すなわち、敗戦直後の数年間は、それまでのムチの全盛期とは逆に、日本の学校からほとんど全ての体罰が現実姿を消していたのである。しかし、この法律と現実の一致という祝福さるべき蜜月期間は決して長くは続かなかった。サンフランシスコ講和以後、独占資本が復活・強化されてくるに従って、日本の「自主独立」の主張は、占領軍に「押しつけられた」新教育を「国情に合うよう是正し」、「民主主義のいき過ぎを正常化する」という名目のもとに、戦後の教育の民主的な制度、方法、内容の全てに亘って反動的な手直しが強行されてきている。そして、現在では、学校における体罰もまた、全国的に復活している。もちろん、体罰の復活のばあいは、教育委員会法や教育課程の反動的改訂のように、公然と行われているわけではない。むしろ、体罰の問題は、傷害事件となって父母が問題にし、新聞紙上で公然化されるという極端なばあいを除いて、教育行政当局も、学校当局も常にこれを「内々の問題」として処理することによって、黙認している。しかも、そのような極端なケースのばあいも、教育行政当局は、事を処するに極めて腰が重く、消極的であり、教師に対する処罰も、教組活動などのばあいと較べて極端に、不当に軽いのである。毎日新聞の夕刊(67年7月28日)が報ずるところによれば、「大阪府教委は生徒に体罰を加え重傷を負わせた大阪府立H高校体育主任、T教諭を28日戒告処分にした。同府教委の調べによると、T教諭は……A君(17)が指示に従わなかったとバレーボールのネット張りに使う鉄のクイで頭をなぐり約三週間のけがをさせた」と。ムチどころか、鉄のクイで頭を殴って重傷を負わせた教師に対して、

教委は戒告で済ませているのである。同じ大阪で、教員の勤務評定反対闘争に関して教組の責任者たちが懲戒免職になっていることを思えば、全く奇怪という外はない。しかも、最近とくに教師に対する管理を強化し、遵法精神を説き、学校教育法などよりはずっと下級の法や規則などの違反には容赦なく取り締まっている教育行政当局が、体罰という明白な法律違反であり、子どもの人権の侵害であるケースに対しては極めて穏便な処置をとっているということの政治的、教育的意味は極めて重大である。体罰が現在では、ほぼ戦前なみに復活していることは、文部省も地方の教育行政当局も充分知っているはずである。それにもかかわらず、彼らが学校教育法の規定に則って、体罰の禁止に積極的な構えを見せているとは決していえない。明らかな致傷事件とまではいかない、従って、父母や社会が問題にはしなかった体罰——これが今日無数に行われている——をとりあげて、教師を懲戒に付したというケースをわれわれは一つも知らない。また、体罰をなくしたり、せめて少なくすることを目指して学校環境を整備しているということも聞いたことはない。つまり、文部省や教育委員会は、学校教育法の規定を無視して、体罰を黙認し、そして、体罰が明らかに致傷事件となったばあいでも、原則的な教組活動より遥かに罪が軽いと見なしているのである。従って、道德教育や生徒指導の研究指定校に熱心なムチの信奉者がいても少しも不思議ではないのである。彼らは、百年前のロシアや今日のイギリスやアメリカの多くの教師と同様に、体罰廃止を「非現実的な」ことと考え、管理主義と形式主義に則り、あるいは「信念」に基づいて、「規律」と「根性」を「愛のムチ」でたたきこもうと努力している。そして、彼らは、自己の非人間性と無知蒙昧さによって当局の覚えをめでたくし、さらに、「殴ることすらしない不熱心な教師」に対して指導すらしているのである。しかし、現在の日本の体罰教師は、百年前のロシアや今日のアメリカ、イギリスの体罰教師、さらに戦前の日本のそれと全く同じであるとはいえない。それは第一に、彼らが単純にムチに頼っているのではないということである。すなわち、彼らの多くは、十数年前には人並みにムチを捨てていたものであり、民主教育のマネ事をやった経験を持っているのである。しかし、マネ事であり、歪曲された民主教育の方法であったために、どうにもうまく成果を挙げることができなかった。ここから彼らは飛躍して、「民主主義に基づいたのでは子どもの教育はできない」という反動的な信念を「実践」で体得しているのである。そして、第二に、彼らのこのような非人間的な教育方法が、「最もヒューマンで、最も科学的な生徒指導法」といわれるあの最近のカウンセリングにとって、無くてはならない補足物となっていることである。このようなカウンセリングではど

うすることもできないような、つまり「科学では解決のつかない」生徒に対して、「科学を超えて、身体と身体が直接触れ合う人間的な愛のムチ」を加えるという体制なのである。このように反動的な、現代と中世の奇怪なモザイクに対して、単なるヒューマニズムを唱えるだけでは問題は解決しない。子どもの理性と環境を無視して、ひたすら心理操作によって催眠術的に「解放感」や「帰属感」、「安定感」を与えようとする非科学的方法や、棍棒を伴った動物的「人間教育」に対して、子どもの理性と客観的条件の整備を重視する真の科学的指導方法、人間としての誇りと自覚の感情をも含めた、人権の自由と平等を徹底していく民主主義の教育を対置し、さらに、上記のような反動的傾向を生み出し助長している現代日本の「闇の環境」に対して、根本的、徹底的な変革を加えねばならない。この点で、ドブロリユーボフの教育思想は、われわれにとって、決して今日的意義を失ってはいないのである。

文 献

- (1) Н. Г. Чернышевский, Статья «Земледельческой газеты» о народном образовании, о телесных наказаниях и о семейных нравах простолюдинов, 1857 (В. З. Смирнов ((ред.)), Хрестоматия по истории педагогики, Учпедгиз, М., 1957)
- (2) Н. А. Добролюбов, О значении авторитета в воспитании, 1857 (Н. А. Добролюбов, Избранные педагогические произведения, АПН, РСФСР, Москва, 1952, стр. 131~155)
- (3) его же, Всероссийские иллюзии, разрушаемые розгами, 1860 (там же, стр. 596~623)
- (4) его же, От дождя да в воду, 1861 (там же, стр. 683~714)
- (5) его же, Литературные мелочи прошлого года, 1859 (Н. А. Добролюбов, Собрание сочинений в девяти томах, Гослитиздат, М. и Л., 1961~64г. т.4, стр. 48~112)
- (6) его же, Письмо, С. Т. Славутинскому. 22 февраля, 1860 г. (там же, т.9, стр. 401~402)
- (7) его же, Собрание литературных Статей Н. И. Пирогова, 1859 (там же, т. 4, стр. 201~212)
- (8) Примечания статьи Н. А. Добролюбова, «Всероссийские иллюзии, разрушаемые розгами» (там же, т.6, стр. 472~476)
- (9) Примечания статьи Н. А. Добролюбова, «От дождя да в

воду》(там же, т.7, стр. 564—565)

- (10) 拙稿「ロシアにおける子どもの創造性擁護の思想——ドブロリューボフのばあい」(『人文研究』, 第15巻8号)
- (11) 「体罰の存廃, 各国の動向——イギリス教員組合の報告書《学校における懲罰》から」(『時事通信 内外教育版』, 第1749号, 昭和41年4月19日)
- (12) 「多様な体罰に代わる方法——西欧諸国の実情, その理論と原則」(同上, 第1751号, 昭和41年4月26日)

付 記

本稿は、昨年11月に和歌山大学で開かれた関西教育学会へ口頭発表したものを土台として、大巾に手を加えたものである。丁度3年前に、私がドブロリューボフの教育論について『人文研究』に発表して(文献⑩)以後、日本の教育学の分野では、私の知る限り、ドブロリューボフに関する著書や論文は出ていない。ただ昨年、エヌ・カ・ゴンチャロフ教授の『教育史論集』(1963年)の部分訳が海老原遙氏によって、『ロシヤ教育思想史入門』(明治図書刊)として公刊された。本訳書は、単に教育史や教育思想史の研究者にとってのみならず、日本の現実の教育問題に取り組んでいる研究者や実践家にとっても大きなプラスになるものとして心から歓迎するものである。しかし、私にとって一つの不満は、ドブロリューボフについてほんの僅かに言及されているだけで、彼についての章が設けられていないことである。これは恐らく、ゴンチャロフ教授が、ペリンスキー、ゲルツェン、およびチェルヌィシェフスキーの各章を設定することで、革命的民主主義者の教育思想の紹介を一応終ったものとされたからではないかと推察される。しかし、ドブロリューボフの諸論文を読めば読むほど、そのことが残念に思えてならない。せめて私の拙い本稿が、その書かれなかった一章を補う一つの素材ともなれば幸いである。